［読む館長講座③］

東北歴史博物館館長講座概要　　2022 年 6 月 25 日

「東北グローバル考古学 part2―原始・古代のロマンと科学―」③

農耕をしないという選択

阿子島　香

はじめに

今回は、人類にとっての農耕開始（農業の始まり）の意義に関して、少しだけですが、考えを深めてみたいと思います。もとよりこの問題は、19 世紀に欧米で近代考古学が確立する頃から、関心をもたれ続けてきた大きな課題ですので、簡単な結論は見えません。しかし、農耕の起源問題を考えるのは、人間の歴史上、きわめて重要なことです。約 12000～10000 年頃、地球が急激に温暖化し、やがて地球上のいくつかの地域で農耕が始まりました。文字の記録は全く存在していない時代ですから、その頃の文化のプロセスを考えるには、考古学が中心的な役割を果たします。現在も、世界中で考古学研究者が取り組んでいる最重要課題のひとつです。

講座では、多くのスライドをみながら、ユーラシア大陸の東端と西端とで、氷河時代終了後に、どのような文化に変化していったか考えてみます。ヨーロッパの中石器時代と、縄文時代の始まりから前半頃になります。一方で、農耕社会の源流とされてきた西アジア地域で、獲得経済（収集経済）から生産経済へ、と言われてきた文化変化の実際はどのようであったか考えてみます。また、東北地方における本格的な農耕社会の到来、すなわち弥生稲作の始まりについて、改めて見直してみましょう。

なお多くの問題が残されていますが、どのように相互関連しているか考える手掛かりになれば幸いです。

世界史から考える農耕の起源

人類は、なぜ農耕社会に至ったのでしょうか。あるいは、農耕を導入しないことの意味は、何だったのでしょうか。氷河時代であった旧石器時代には、すべての人類は、狩猟・採集・漁労で食料を獲得していました。農耕、そして牧畜によって、人類は食料を生産するようになったのです。けれども、温暖化した地球上では、人間集団のたどった道はたいへんに多様でした。さまざまな生業の形が併存し、近年でも少数ながら狩猟・採集・漁労で生計をたてる民族もあります。ややもすると、19 世紀に一般的に考えられたように、文化が遅れているとか、劣っているとか思われたりもしますが、それは誤りです。農業以外

の生業による生活文化の研究は、考古学、民族学で深められてきました。さまざまな環境に巧みに適応した、優れた文化が解明されてきました。たとえば、宮城県の縄文人たちの貝塚文化を考えてみれば、直感的に理解されると思います。

進化論の提唱者チャールズ・ダーウィンは、人間が「知識」を持ったことが重要であったと仮定しました。農耕の起源は、地面に蒔いた種が作物に育つという経験的知識の必然的な結果だとして、その後に影響しました。狩猟採集に比較して、農耕が優れた生産様式であって、その知識と技術の伝播が農耕拡大を導いたという、近年まで根強くあった考え方につながっていると言えます。

チャイルド考古学の遺産

20 世紀前半にイギリスで活躍した偉大な考古学者、ゴードン・チャイルド（V. Gordon Childe, 1892－1957）は、人類の飛躍として「食料生産革命」（「新石器革命」）と、「都市革命」の二つをあげ、史的唯物論（＝唯物史観）の立場を基調として、人類の発展段階について論じました。『文明の起源』『考古学の方法』などの名著の数々があり、日本考古学にも大きな影響を与えました。最終氷河期の終わりに、砂漠地帯への乾燥化が進行し、水の周りに集まった動物と植物の間に共生関係が生じて、そして人間が介在し、やがて農耕社会が成立した。その中から都市と国家が発生したというシナリオです。農業、家畜飼養、定住がセットとして考察され、そして生産力の上昇は、社会内に「余剰生産物」を発生させて、蓄積が進みました。複雑な社会組織が形成されて、階層化は進行し、また人々の集住が進んで、中核的な場所に、都市が発生し、そして権力と国家が生まれていきました。学史的に、チャイルドの学説は、マルクス主義の歴史理論に立脚していたと評価されています。オーストラリア出身で、エジンバラ大学、ロンドン大学で活躍しました。

「新石器革命」を、進歩と発展の一部として捉える進化史観が表われています。なお「革命」という用語にはかなり異論もあります。たとえば青柳正規（2009）は、革命という言葉の概念は近現代的なもので、狩猟採集から農耕への移行は、数千年という長い時間をかけて起きたもので、とても「革命」と呼べるような急激な変化ではなかったと指摘しています。ついでながら、この本は、ホモ・サピエンスの登場から世界の文明起源までを解読した、超一級の概説で、館長イチ推しであります（参考文献）。あるいは、歴史学者の一般的な批判には、革命の語は人間社会の側からの積極的な目的行動を示す、特に政治的な行動を指すという指摘もあります。けれども、「新石器化」がもたらした変化とは、人類にとっては、やはり一大変革であり、その後を規定したものですので、チャイルド以降の多くの先学同様に、私も人類史上の画期的な出来事という意味で、「新石器革命」の言葉を継続して使いたいと思います。

アメリカ考古学の動向から

20 世紀後半になると、各地域での研究が進み、多くの資料が得られてきた中で、アメリ

カでは「新しい考古学」（New Archaeology）が登場しました。ブレイドウッドは、西アジアの恵まれた環境で、コムギやヒツジなどの野生種に対して、長期間の試行錯誤を経て、やがて人類は知識を蓄え、次第に農耕社会に至ったと論じました。漸進的な文化発展の考え方は、「初期農耕」という言葉によく表現されています。

西アジア考古学の泰斗であったブレイドウッド学説には、ビンフォードの反論がありました。農耕発生プロセスは、むしろ周辺地域で起きたとの指摘でした。またコーエンのように、農耕開始には人間集団の人口増加が大きな要因であったと考える学説も有力でした。現在もさまざまな考え方が、各地域のフィールド実践とともに行なわれ、議論が続いています。やや専門的ですが、定向的な漸進的進化を重視する、農耕と狩猟採集の補完あるいは対立関係に着目する、地域の環境と人類集団の相互作用を考える、所与の環境条件の人口支持力を問題にする、生業活動への労働量と生産の安定性を考える、集落構成と道具の種類を検討する、移動生活と定住生活を比較する、そのほか様々な研究方向があります。

縄文からスター・カーへ

今回の副題は「縄文からスター・カーへ」としました。この副題には若干の思い入れがあります。1990 年代に、東北大学考古学研究室の先生と若手が、イギリスへ行かれた国際シンポジウムのテーマがこれでした。イギリス側で、縄文文化との比較考古学研究を重要課題とされたのでした。須藤教授は、縄文から弥生へ、すなわち東北農耕文化の起源研究をライフワークの一つとされ、また大崎市（旧田尻町）中沢目貝塚など、縄文貝塚研究を強力に推進されました。（阿子島（1999）「書評・須藤隆著「東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－」」『歴史』第 92 輯　東北史学会）。

さて、農業起源を考えるために、逆に農耕文化の道をとらず、長期間にわたり安定した社会を築いた二つの文化を比較してみたいと思います。ユーラシアの西端、イングランドの中石器文化、ユーラシアの東端、日本列島の縄文文化、いずれも非常にユニークな内容があります。4 月の講座でお話しましたが、縄文が世界遺産に登録されたのも、人類にとっての普遍的価値が証明されたからでした。

スター・カー（Star Carr）は、ヨークシャーのスカーバラ近郊にあるマグレモーゼ文化初期の遺跡です。1949 年～51 年の発掘調査に基づいて、1954 年にグラハム・クラーク（1907－1995）が著した研究は、「環境考古学」「動物考古学」を確立した金字塔と評価されています。約 11000 年前に、かつての古フリックストン湖のほとりに滞在していた狩猟漁労民が、低湿地に形成された泥炭層中に、豊富な有機質の遺物を残しました。アカシカやノロジカ、エルクシカ、イノシシ、鳥類や小動物、木材、植物遺体、逆刺のある銛など骨角器、スクレイパー、石斧、細石器（弓矢）、ほか多数の出土品が分析されました。居住の季節としては 3 月～6 月頃が推定されています。アカシカのツノ付き頭蓋骨を加工した頭飾り（21 点）は、シャーマンの存在、シャーマニズムの儀礼を推定させます。

スター・カー遺跡はイギリスで最も著名で重要な中石器時代遺跡ですが、近況の遠景写

真をみると、一面の草地が拡がっています。ちなみにイギリスの観光関係のサイトをいくつか調べてみましたが、特に行って一見しても何も分からないと記されていました。近年、1985 年からヨーク大学、マンチェスター大学、チェスター大学などのチームにより発掘調査が再開されました。プロジェクトのリーダーは N.ミルナー氏で、学際的チームでクラークの旧発掘区に重なる新調査区を広げています。2015 年には、磨製のペンダントに芸術的線刻が施された出土品で話題になりました。ペンダントは頁岩（shale）製で、35mm X 31mm の大きさ、厚さが 3mm、片寄って穴があけられています。平らな面には複雑な線刻が施されていて、光学顕微鏡や電子顕微鏡で詳細に観察されて、線刻相互の切り合い関係も分析されています（スライド）。大きさ１～２cm の頁岩小石に穴を穿孔した「ビーズ」も 20 点以上出土し、ネックレスとして使われたとされます。

ヨーロッパ中石器時代の編年と環境変動を概観してみましょう。スライドは、松井章著作集（2021）『動物考古学論』（新泉社刊）中、「エルテベレ文化とその評価」からです。デンマークのリンクロスター貝塚など発掘にも参加されました。松井さんは私の東北大学の先輩で、学生時代にアメリカのネブラスカ・リンカン大学に留学され、私にも留学を勧めてくれた数少ない先輩でした。故人となってしまいましたが、想い出は尽きません。奈良文化財研究所で、日本の動物考古学のパイオニアとして活躍されました。1970 年代当時の日本考古学は、世界の動向からかなり隔絶的だったといったら、叱られるでしょうか。今昔の感がありますが、先駆的だったと思います。

デンマークの中石器文化の編年は、マグレモーゼ文化（早期）8300-7500BC、カンバ・マツ属、マグレモーゼ文化 7500-6200BC、ハシバミ・マツ属林、コングモーゼ文化からエルテベレ文化 6200-3300BC、ニレ・シナノキ属林、と遷移します。この間、地球的な気候温暖化が進行し、亜寒帯から温暖湿潤なアトランティック気候区への変化がありました。動物相は、アカシカ、ノロジカ、イノシシ、ゲンギュウ（原牛）、オオシカ、ヘラジカなどで、スター・カーとも共通します。エルテベレ文化に至って、貝塚が盛んに作られ、定住化が進み、土器が使用されるようになりますが、全体的に北欧の中石器文化は停滞的でったという評価がなされています（諸説あります）。

ヨーロッパ北部の中石器文化では、細石器が多数製作されていました。幾何学的な形をした「幾何形細石器」（geometric microlith）があります。小石刃から加工した石鏃に示されるように、弓矢を活用した森林地域での活発な狩猟活動、小動物の利用、水辺での盛んな漁労活動がなされました。石器で特徴的な種類に、石斧があります。温暖化に伴って北上した森林の中で、木材を伐採する活動が重要だったことを示しています。骨角製の銛頭も多数出土しています。スター・カーからは、200 点ほども出土していて、イングランドの主要なコレクションになっています。いくつもの博物館に所蔵先が分かれているので、データベース連携が進んでいるようです。銛は逆刺（かえり）を有する資料が多いです。デンマークの Ulkestrup Lyng では銛先を木製の柄に、紐と接着剤を用いて着装した珍しい事例もあります。

肥沃な三日月地帯

「肥沃な三日月地帯」という地域の名は、皆さんも教科書などで目にしたことがあるかと思います。メソポタミア、ティグリス・ユーフラテス川の北側から、イラン、ザグロス山脈の西側、トルコ、アナトリア高原の南側、そしてパレスチナに至る広大な地域です。降雨量も年間 300mm 程度以上あり、もともと野生の穀類が自生し、人類の農耕起源の揺籃となった地域です。有名な古典的遺跡も多くあります（地図スライド)。

ここで世界の農耕起源を簡単に概観してみましょう。(「前」は、紀元前です。なお各年代は標準的な通説で、最新の研究からは、より古くなる傾向があります)。トルコ南東部で、ヒトツブコムギとエンマコムギは前 1 万年頃に最初の栽培化があったとされます。エジプトで前 7000 年、インダス川流域で前 6000 年。長江上流で前 8500 年、華南・華中で前 7000 年、これらは所謂「四大文明」の地です。私達世代の教科書では、中国は夏・殷・周への「黄河文明」と習いましたが、その後に長江流域を始め同様に重要な古代文明圏が明らかになり、近年は「中国文明」になっています。長江上流にあたる四川省の青銅器文化「三星堆文化」は、祭器「縦目仮面」や金製品などで日本の博物館巡回展でも人気ですので、ご覧になった方もいらっしゃると思います。ヨーロッパには南東から前 6000 年、西・中ヨーロッパに前 5000 年ころ、新石器文化の複合として拡大しました。欧州から見ると今も「オリエント」と言うように、文明の到来には「光は東方より」という言葉が昔からありますが、新石器文化、さらに遡って新人（クロマニョン人）についても、「東方より」三度、なのでした。

新大陸を見ましょう。アンデス地域で前 5000 年（ジャガイモ)、メキシコで前 5000 年、アメリカ南東部ミシシッピ川流域で前 2500 年などです。新大陸では、特にトウモロコシが重要です。中米では野生種「テオシンテ」から、次第に大形化していくトウモロコシ栽培の道筋が研究されてきました。北米各地での初期農耕は、トウモロコシ、マメ、カボチャの三大要素が組み合わさるパターンに多様性があります。狩猟漁労も併せて生業活動を構成することも普通にありました。

肥沃な三日月地帯では、ヤギ、ヒツジなど家畜の飼養も、農耕と同様に重要でした。穀物栽培と家畜飼養が、オアシスなどでの接近共生から、次第に定住村落社会へ、そして国家に至るという、チャイルド学説が改めて想起されます。ところで家畜を世界的に見れば、「遊牧」という、もうひとつの人類の生き方が重要でした。現在でも地球上の広大な地域に、遊牧民が健在であることは、皆さんもご承知のことです。歴史的には、ユーラシアの農耕文明の周縁に強大な遊牧民族国家（東アジアでは「騎馬民族国家」）が、いくつも存在していたわけです。戦後に言論が自由となり、日本国家の起源論争がオープンになりました。古墳時代の日本国家形成をめぐっては、江上波夫氏の騎馬民族征服王朝説（『騎馬民族国家』）の学説が大きな影響を与えました。このような論題も、日本史プロパーのみならず、歴史人類学的に捉え遊牧という脈絡で広く考える必要があるでしょう。（今も、完全に解決

してはいないかもしれません)。

以上のように概観してきますと、なんと人類の歴史は複雑なのだろうという実感が、新たになって参ります。私達は、整理された歴史の理論で、全世界をまとまった物語で理解したいという欲求を本来もっています。実際、20 世紀後半には、世界をひとつに理解するモデルが成り立つような概説が、出来かかったように思えました。チャイルドが活躍したのもそのような時代でした。しかし、個別の研究が深化するにつれて、人類史はそのような、モデル的道筋をたどってはこなかった、という複雑な過程が、解明されてきたのです。これからも、個別研究の重要さは、増大していくでしょう。

イェリコの先土器新石器文化

西南アジアの農耕集落の代表的な事例として、イェリコを見てみましょう。同じ場所に居住が繰り返されると、居住面は重複して、「テル」と呼ばれる人工丘遺跡が形成されます。丘全体に同じ時期の居住面があるわけではなく、ある時期の居住集団は、過去の居住面を改変して上に重複していくので、考古学的な発掘は難度が高い、けれども層位的に同じ場所で文化変化が捉えられるので、非常に有効、それがテルの性格です。イェリコもテルであり、近傍のオアシスが占地の鍵でもありました。1952～59 年に K.ケニォンが発掘調査を行いました。1968 年以降もヨーロッパ隊が調査していますが、紛争地ということもあって、ケニォンの調査がテルの基底部まで達している基準研究とされています。

基底部には、約 11000 年前の中石器時代、採集狩猟文化であるナトゥフ文化（Natufian culture）が残されています。野生の穀類が豊富な土地で、すでに祭壇のような基壇、石器や骨器が出土しています。石器は小石刃を鎌の刃に使用して、野生穀類を収穫しました。ヨーロッパでの小石刃は、狩猟道具でしたが、こちらでは収穫具だったのです。技術的、形態的には、たいへん似ています。似て非なるモノですね。なお、エジプトでは、後期旧石器時代から、着柄した小石刃で、野生植物の収穫を行って、磨り石と石皿の製粉セットは、17000 年前まで、遡るとされます。なお時代を問わず、穀類の収穫に使用した石器には、独特の使用痕「コーングロス」が形成されて、顕微鏡で観察すれば使用法を断定できるので、有力な証拠になります。

特筆されるのは、紀元前 8000 年紀の集落で、巨大な濠と石造城壁が作られています。その時代はこの地域に特徴的な「先土器新石器時代 A 期」（PPNA, Pre-Pottery Neolithic A）に属します。イェリコの塔と称される高さ 8.5m に及ぶ石造塔、集落を囲む城壁は、壁の厚さ 2m、高さ 4mという石壁です。前 7220 年頃から PPNB（先土器新石器時代 B 期）に入ります。人間の頭蓋骨を石膏で固めて眼を貝殻で入れた頭部が知られています。祖先祭祀に関連すると考えられています。（イェリコ関連のスライド)。

なお、日本考古学では、学史的に「先土器時代」というのは、太古の旧石器時代全体を指しました（杉原荘介による時代区分)。1960 年代の画期的シリーズ『日本の考古学』も、第 1 巻は「先土器時代」になっています。現在も、「旧石器時代（先土器時代、岩宿時代)」

のように、解説書や展示で使われています。今、西南アジアの先土器時代の実態に触れる時、かなり違うという点をご説明したいと思いました。

驚くことには、定住から防御集落に至るテルの文化変遷において、土器を使用していなかった時代に、このような文化進化が進行していたのです。食糧資源の変化を出土した動物遺存体からみると、ナトゥフ文化の中石器時代から原新石器時代までは、ガゼル（カモシカの類）が中心ですが、PPNA から PPNB に至って、ヒツジとヤギが圧倒的になります。繰り返しになるかもしれませんが、世界の新石器時代は、土器、磨製石器、農耕、家畜飼養、定住が、常にセットとして時代区分されるのではない、という本日講座のポイントが、西アジアでもこのような状況であるという事例解説になると思い、少し詳しくご紹介しました。

イェリコは、死海の北西、標高マイナス 250m という低地にあります。考古学の一分野に「聖書考古学」（Biblical Archaeology）という領域があります。旧約・新約聖書の記載や関連の土地、文物を検証していく考古学で、イスラエルはじめヨーロッパ各国でかなりの歴史と蓄積とを有しています。イェリコの遺跡も聖書考古学的には、城壁が崩れる戦い、旧約ヨシュア記の物語と結びつけられます。音楽では、黒人霊歌（Afro-american Spirituals）の「ジェリコの戦い」の場として歌われてきました。昔、学校の音楽の時間にありました。そして、1967 年に第 3 次中東戦争で、イスラエルが占領しました。この地は、パレスチナ自治区のヨルダン川西岸地区にある特別の場所で、しばしば国際関係・紛争の物語の舞台になります。早く恒久的な平和が訪れることを願うばかりです。

地球温暖化の多様な影響

氷河時代末期の地球温暖化が、いろいろな地域の人間集団に与えた影響は、多様でした。北西ヨーロッパのように、トナカイ狩猟民が北方へ移動した地域がありました。後期旧石器文化であるマドレーヌ文化の北方への拡大として捉えられ、代表的な遺跡には、パリ郊外のパンスヴァンや、エチオール（約 13000 年前）があります。トナカイ狩猟民は、やがてアカシカを狩猟していくようになります。マドレーヌ文化はフランス、ドイツ、ポーランド、北欧各国で、細石器を主要な利器とする特徴的な、各地の中石器文化に移行していきました。

イギリスの中石器時代は、氷河後退後まもなくの約 11600 年前から、約 6000 年前まで続き、新石器文化に移行します。年代で縄文文化と比較すれば、縄文早期の始め頃から、前期後半頃になります。「縄文遺跡群世界遺産本部」作製の 15 ページの広報冊子（2022 年 4 月発行）に、簡潔にその意義が説明されています。「北海道・北東北の縄文遺跡群は、農耕社会以前の人々の生活と複雑な精神性を示す 17 の考古遺跡から構成され、紀元前 13，000 年頃から紀元前 400 年頃にかけて北東アジアで発展した狩猟・漁労・採集社会における定住の開始、発展、成熟を示す稀有な物証として、顕著な普遍的価値が認められます」。繰り返しになりますが、「人類はなぜ農耕を始めたか」考えるには、逆の「農耕をしないという

選択」の文化内容を考察することが重要であると思います。

新石器文化としての縄文文化（前期から晩期、館長講座令和 3 年度、第 8 回「縄文への道」参照）の西には、中国東北部から沿海州にかけて拡がる狩猟採集諸文化が展開していました。その西から南西にかけては、黄河流域を中心に、雑穀農耕文化が展開していました。そして、長江流域には、中国浙江省河姆渡遺跡の稲作文化が、6500 年以上前から発達していました。日本列島には九州北部に最初の稲作文化複合が定着し（縄文晩期から弥生「早期」）、約 600 年かけて日本海沿いに東北地方北部まで到達したとされます。中国南部からは朝鮮半島を経由した可能性が高く、雑穀農耕文化のエリアを経由しますから、日本列島の弥生文化（ないしそれに先立つ文化）に、雑穀農耕の要素が複合していたとしても、不思議ではありません。その実態は目下の重要な研究課題といえます。

ビンフォードの考え方

ビンフォードは、1983 年に著した In Pursuit of the Past（植木武訳者代表『過去を探究する』雄山閣　2021）の中で、「農耕の起源をめぐり」（第 8 章）これまでのさまざまな農業起源学説を批判的に検討しています。本訳書は、いまや古典的となった名著の、初めての日本語訳です。ただ、多くの図や写真が、おそらく版権の関係か、不掲載なのが惜しまれます。氏は戦後の沖縄統治に、アメリカ軍人として駐留し、その間に人類学的関心を深めました。これは、八重山列島に移住した農耕民集落という写真です。沖縄本島、硫黄島、サイパン島からの移民村とされます。農業起源学説を論じる中に、現代の琉球の写真が何葉も出てくるのは、少し不思議な気持ちにさせられます。

カリフォルニア・インディアンの事例などを取り上げて、なぜ農耕が始まったかを考えることの難しさを論じます。重要な前提として、動物植物の資源がたいへん豊富で恵まれた場所（楽園）では、人間はそこにとどまり移動しない、そしてあまり働かなくなるという、広く持たれてきた発想を、「エデンの園命題」「ナマケ原理」（Garden of Eden Proposition, Slug Principle）と呼んで厳しく批判します。ビンフォードによれば、定住生活が移動生活よりも安定しているわけではなく、狩猟採集諸民族の移動生活には、資源の変動に対するバックアップの方策がしっかりと組み込まれているというのです。

歴史的な民族調査によると、1910 年にカリブー（アメリカトナカイ）の群れ個体数が激減した時のこと、ヌナミュート・エスキモーたちは沿岸部の水産資源がたいへん豊富な土地（「エデンの園論者」が取り上げそうな場所）に移動しましたが、カリブー生息数が回復すると、もとの内陸地での移動生活に戻った資料をあげています。そもそも、狩猟民は、食料資源に恵まれている時には、むしろより広大な地域を回って、資源に関する情報を集め、かつ集団相互の間の絆を再確認します。そのような活動は、移動生活の安定を保障し、資源の変動時に対処する方策を準備させるのだとします。本来、人類には移動生活が本質的に備わっている暮らし方であると力説します。定住化および農耕の開始は、おそらく何らかの条件によって、自由な移動が妨げられたプロセスの結果ではないかとします。一つ

の要因は、やはり人間集団の人口増加と、資源収集領域の限定なのではないかとします。いずれにしましても、私達は、定住的農耕文化は、移動的狩猟採集文化よりも安定的で、集団の生活にとって有利であったという前提を、再考してみるべき問題提起として、この議論を受け止めたいと思います。

東北地方の稲作起源の追究

東北地方の考古学史を紐解きますと、弥生農耕は先進的であって、その優れた生産様式の知識と技術が、遅れていた東北に伝播したのであった、という歴史観が見え隠れします。大正 14(1925)年に山内清男は、多賀城市桝形囲貝塚（弥生中期）から出土した土器の底面に、稲籾の痕が付いているのを見出して「石器時代にも稲あり」と発表しました。昭和 33(1958)年に伊東信雄は、青森県田舎館村垂柳遺跡を発掘し、弥生土器としての田舎館式土器を設定し、炭化米を発見しました。この遺跡からは後に、青森県の調査（1982、83）で水田遺構も検出されました。仙台平野の弥生中期の農耕集落のようすは、1980 年代から大きな注目を集めました。また気候の寒冷化と続縄文文化の南下は、農耕社会発展の「停滞」のニュアンスを含んでいるようです。弥生前期の遠賀川系土器の出土は「文化伝播」と認識されます。どの土器型式期から稲作が開始されたかが、どこまで「遡るか」として追求されています。

弥生時代の水稲農耕は、非常に複雑な技術の複合でした。それだけに、旧来の縄文社会との落差が顕著に映ります。今、東北地方において、縄文から弥生への変動とは、いったい何が起きて、なぜそうなったのか、という問いかけを改めて考える必要があります。

スライドは、垂柳遺跡の水田跡に立つ伊東先生です。1983 年までの 2 年間の本調査で、垂柳遺跡からは国道 102 号バイパスの路線予定地に、656 枚もの弥生中期の水田遺構が検出されました。遺跡は、平成 12 年に国史跡に指定されました。地形を巧みに利用して、小さなサイズの水田が並びました。第 4 区からは、最多の 225 枚が検出されて、それらの平均面積は 9.58 平方メートルという小形の水田です。第 1 区から第 7 区まで、平均は 3.79～11.05 平方メートルの開きがあります。弥生前期の弘前市砂沢遺跡は、完掘された 2 号水田が 81.3 平方メートル、復元された 3 枚では 75～205 平方メートルで、垂柳よりも大形となっています。地形や水利などに適応していた技術を示します。これらの大きさを現代の水田と比較すると、違いがわかります。

宮城県農政部農村振興課の広報誌『田水郷（たすき）通信』（2022.6）によりますと、明治末期には水田 1 枚の標準が約 1000 平方メートル（10a）であったものが、昭和 38 年以降の県営圃場整備事業を経て、さらに平成初期からの大区画圃場整備事業により、現在の標準は 1 万～2 万平方メートル（2ha）になり、実に 20 倍になっているとのことです。水田遺構のサイズに限って見てみましたが、収穫方法とその道具（石包丁が代表的です）、いろいろな種類の磨製石斧（大陸系と称されます）、土器の型式と機能が地方色としてどのように捉えられるか、また集落の形と構成など、東北地方における初期の弥生農村の実際の

姿の追究には、多くの残されている課題があります。

なお、垂柳遺跡には、道の駅「いなかだて弥生の里」が開設され、また埋文センター「弥生館」では、保存処理がなされた水田遺構の上に、実際に足を踏み入れることもできます。田舎館村といえば、水田の作付け種類で絵を描く「田んぼアート」の元祖の地として知られています。考古学上での、東北弥生文化の水田発見の歴史を振り返りますと、何かしら不思議なつながりがあるような気がいたします。

「新石器化」と日本列島

世界考古学の研究史上では、伝統的に新石器文化の指標とされてきた要素があります。技術的な磨製石器の出現、土器の製作開始、定住生活の進展、栽培植物の一般化と集約化、家畜の飼養（牧畜）などです。西アジアに範例をとったモデルは、人類文化史の考察に大きな役割を果たしました。

しかし、世界各地を比較すると、それらの指標の出現の有無、年代、組合せには、さまざまな多様な様相が認められます。日本列島の東北地方を事例としましょう。磨製石器の出現は、約 35000 年位前の後期旧石器時代前半期、土器の出現は約 15000 年前の、縄文時代草創期はじめ、定住生活の一般化は、約 9000～8000 年前（？）、段階的な栽培植物の存在は、狩猟採集漁労と組み合わさった「縄文農耕」として、クリ栽培、マメ類、雑穀栽培の可能性（土器圧痕法などで、なお追究されています）、さらに稲作農耕が縄文経済（後期・晩期）の一部として存在した可能性も指摘されています。

かつて諏訪考古学研究所を主宰した藤森栄一は 1960～70 年代に、中部高地（八ヶ岳の南麓）の縄文中期文化の性格について、定住集落、土器文化の隆盛（煮沸・貯蔵・供献）、耕作具（打製石斧と大型石匙）、地母神的信仰、生死と再生の思想など、多面的に考察して「縄文農耕論」を提唱しました。文化論からの先駆的考察と思いますが、当時の日本考古学の主流には正面から受け止める思潮は希薄でした。一つには、弥生農耕の飛躍的「先進性」と、縄文社会の「停滞性」とを比較文化の軸線におくパラダイムが強かったように思われます。「発展史観」の中では、複合的な「多角的生業経済（broad spectrum subsistence economy）」という視点、これはすでにアメリカのプロセス考古学でフラナリーなどによって論じ始められていましたが、日本考古学の主流とはなじみがよくなかったようです。賀川光夫による、西日本の後晩期農耕論の提唱も、学史的には傍流となっていたようです。当時、考古学の隣接分野から投げかけられた課題（「稲作以前」、「照葉樹林文化論」、「半栽培段階論」など）も、実証性と方法論という枠の中で、例えば栽培植物本体をどのように実証するかなど、積極的な評価よりも批判的な思考がめだったようです。私は当時、文化人類学にも興味を持っていた学生の立場でしたが、考古学プロパーの先輩諸氏の批判的な表現を今も思い出します。また、縄文時代研究の主流は、土器の編年研究が中心であった当時でした。今も名残があるかもしれません。石器研究でさえも、型式学が主流で、機能論は傍流とされていました。ともあれ、農耕文化については、やはり段階論的な二者択一

の考え方が強く、それが縄文農耕論に対しての批判的態度になる要因であったと、学史的に評価できるのではないでしょうか（館長の学説史）。

1994 年に、三内丸山遺跡が本格的に脚光をあびて後、縄文文化観は一変したといわれます。重要な点の一つとして、狩猟採集文化が持っていた可能性に関する再認識があったと考えられます。これは、昨年の世界遺産登録につながっていく、認識の変化でもありました。

「共生経済」と「環境負荷経済」

狩猟採集社会が農耕社会に変化していく過程は、従来「獲得経済」から「生産経済」への革命的転換として考察されてきました。この変化を、人類集団と自然環境との長期的な相互作用という観点から見直してみましょう。農耕開始のプロセスを、縄文時代のような**「共生経済」から、「環境負荷経済」への転換**（館長仮説）として捉えることで、人類史に学ぶ新たな視野を拡大できないでしょうか、問いかけてみたいのです。集約的な農耕社会であっても、物質資源の環境内循環がシステムとして確立していた文化では、長期的な生産力の拡大から、強大な国家システムの持続が可能でした。しかし、環境負荷経済がフィードバックのループに陥った文化では、一時的な文明や国家の隆盛も、やがて環境からの文明持続をおびやかすような方向の変動が加速し、文明・国家の終焉が訪れました。そのような道筋をたどった古代文明も、人類史にはいくつも存在します。気候寒冷化（小氷期）や乾燥化などの自然環境の変動は、古代文明衰退の要因として重視されます。それに重なって、文明側のしくみの対応が、文化的要因として考察されていくべきでしょう。現代の私達は、いまこそ人類の長期的歴史に学ぶべきであろうと考えます。比較考古学の一層の進展が望まれます。

定住化が進行し、野生種が栽培種へと変化し、農耕は次第に集約化し、人々は集住するようになり、都市が生まれ、やがて国家が成立する、という発展段階論の図式は、現在も大筋で認められています。しかし、そのような道筋をたどった地域は少なく、多くの地域では**「農耕をしないという選択」**が続きました。

また農耕の在り方も多様でした。農耕が、狩猟採集や漁労と組み合わさった、複合的な生業システムとして継続した文化も、多くあります。おそらく日本列島の縄文文化の後半には、そのような生業システムが存在したと考えられ、実証的資料も増加してきました。農耕の有無を、集約的な二者択一的な選択として考える前提は、全世界的には、必ずしも成立しません。また家畜の飼養についても、広域遊牧という有力な生業を含めて、別次元の文化要素として比較研究していく必要性は、大きくなっていると考えます。西アジアやヨーロッパでのモデルは、重要な学史的意義を有していますが、決して普遍的なモデルなのではありません。

おわりに

人類は農耕をなぜ始めたのかという、古くて新しい問題の追究は、比較文化の方法で、世界の各地域を、実証的に研究していく中で、さらに進展するでしょう。

今後は、農耕文化と狩猟採集文化とを、「進歩・発展段階」としてではなく、環境との相互作用という「適応的プロセス」という観点から、改めて考え直す必要があるのではないでしょうか。東北地方における弥生稲作農耕の開始についても、進んだ地域の文化が伝播した、その時期と文化要素といった視点を一旦おいて、強固で合理的な縄文社会の村々との間の、人々の相互的な関係という脈絡（東北の縄文と弥生の**「交差する社会」**）で、見直していくべきでありましょう。**農耕をしないという選択は、実は縄文社会の側にイニシアティブがあった**という発想も、必要であると思います。

（文中一部敬称略）。

（本稿は、当日スライドも踏まえ、講演内容に補足して加筆し、再構成したものです。テーマが大きな論題ということから、やや長文になっています。また参考文献は、日本語の比較的入手・閲覧しやすいものを選択しています。）

参考文献

青柳正規（2009）『興亡の世界史 00 人類文明の黎明と暮れ方』講談社（学術文庫版もあり）。
阿子島香編（2015）『北の原始時代』吉川弘文館。
クラーク、G.（1989）増田精一監訳・小渕忠秋訳『中石器時代－新石器文化の揺籃期』六一書房。
縄文遺跡群世界遺産本部編（2022）『世界遺産　北海道・北東北の縄文遺跡群』
チャイルド、V.G.（1951）禰津正志訳『文明の起源』上・下、岩波新書。
東北大学総合学術博物館・東北歴史博物館編（2013）『考古学からの挑戦－東北大学考古学研究の軌跡』東北歴史博物館特別展図録。
ビンフォード、L.R.（2021）植木武訳者代表『過去を探究する－考古資料解読の方法と実践』雄山閣。